

# 大学生がもつ陸上競技授業の学習観に関する研究

— 過去の運動・スポーツ経験に着目して —

常浦光希・阿部直紀・松本佑介・齊藤一彦  
(2024年10月9日受理)

A Study on University Students' Learning Perspectives on Track and Field Classes  
— Focusing on past exercise and sports experiences —

Kouki Tsuneura, Naonori Abe, Yusuke Matsumoto and Kazuhiko Saito

**Abstract:** The purpose of this study was to clarify the actual learning perspective of university students in track and field classes from the perspective of past athletic and sports experience. The results of the analysis showed that those who had experience in individual sports during high school had a significantly higher "perception of the appeal of sports" than those who had experience in team sports. However, no significant differences were found in "perception of the appeal of sports" between junior high school, university, and previous sports experience. No differences were found in the learning perspective of track and field classes for other subscale factors, sports experience from junior high school to university, or experience with track and field. It became clear that differences in high school athletic and sports experience may lead to differences in the perception of the enjoyment of exercise in track and field classes and the enjoyment of competing for victory and defeat among the subjects of this study. The results show that past athletic and sports experience is unlikely to affect learning perspectives on track and field. Although this study was focused on the learning perspective of track and field alone, we believe it is necessary to verify whether differences in learning perspectives arising from previous exercise and sports experience are unique to track and field.

Key words: track-and-field, conceptions of learning on physical education, physical education teacher training course

キーワード：陸上競技，体育学習観，保健体育科教員養成

## 1. 緒言

教師には、自らその力量を継続的に高めていく姿勢が求められる（白石ほか，2020）。この教師としての力量を構成する要素として、知識・技術・信念が挙げられるが（吉崎，1997）、木原（2004）は信念をその中核を据えている。この信念の1つに授業観がある（朝倉，2016）。授業観とは、教師がどのような授業を目指しているか、どのような授業を良い授業と捉えているかという考え方であり（山平ほか，2020）、教師の力量向上において授業観の形成が重要な役割を果たす

（成家ほか，2018）。とりわけ体育においては、授業観が保健体育教師の実践と体育的活動の成果を最も直接的に規定する信念であることが指摘されている（朝倉，2016）。このような背景から、主に教員養成課程の学生を対象として、体育授業観の実態やその変容を検討する先行研究が行われてきた（例えば、江藤，2019；嘉数・岩田，2013）。しかしながら、教員養成課程の学生といっても、指導者としても経験が欠如している場合、指導観について調査することは難しいという指摘もある（白石ほか，2020）。その中で学習観、すなわち、学習とはどのようなものかという学習者自身の

考え（鈴木，2010）を調査することで、間接的にはあるが、指導観を調査することができる（伊藤・伊東，2014）。したがって、学習観の調査は、指導観の調査の前段階として適していると考えられる（白石，2020）。

このような背景から、教員養成課程学生の体育学習観を調査した研究が実施されてきた。白石ほか（2020）は、保健体育科教員養成課程入学者の体育学習観について、教職志望度との関連から調査した。その結果、教職志望度の高い学生は、その他の学生と比較して、「体育授業では態度面や認知面を成長させることができる」という体育学習観を有していることが明らかとなった。江藤・三田（2023）は、初等体育科教育法における学生の体育授業の学習観及び学習方略に関する認識を明らかにすることから講義の学修による変容を検討した。その結果、講義後において、体育授業の学習観の「運動技術の習得」「コミュニケーション能力の涵養」「身体と運動に関する知識の修得」に関する得点が上昇したことが明らかになった。このように教員養成課程学生の体育学習観を調査した研究では、その実態や指導法の授業による変容が検討されている。

しかしながら、これらの先行研究は、体育全般に関する学習観に着目しており、各運動種目に関する学習観について検討されていない点で課題が残される。体育には体づくり運動、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンスの運動領域があり（文部科学省，2018）、それぞれの領域に対する学生の学習観が異なる可能性がある。その中でも陸上競技には、多岐にわたる種目それぞれに特性があり、専門的な技術・指導が求められる、学校現場において取り扱いが難しい領域の1つである（佐々木，2022）。また、陸上競技は、体育授業における実施率が高い領域としても挙げられる（及川・長谷川，2017）。そのため、陸上競技授業に関する学習観は、各運動領域の学習観を検討する際の事例として注目されてよい。そして、学生の陸上競技授業に関する学習観を検討する際には、過去の運動・スポーツ経験の視点から調査することが重要であると考えられる。体育教師が抱く価値観やそれに基づく認識は、教員養成課程に入学する以前の保健体育授業経験やスポーツ経験といった過去の経験から影響を受けている（朝倉，2016；嘉数，2012）。そのため、過去に陸上競技をはじめとした個人種目を専門的に取り組んでいた学生と団体種目などを経験した学生では、学習観が異なる可能性がある。

そこで本研究では、大学生がもつ陸上競技授業の学習観の実態について、過去の運動・スポーツ経験の視点から、明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

### 2-1. 調査対象

本調査の対象者は保健体育教員養成課程がある大学4校に所属する学生であった。調査対象者に対して、2024年7月下旬にGoogleフォームを用いたWebによる質問紙調査を実施し、155名の回答が得られた。そのうち、学習状況の差異を考慮し、大学において陸上競技の授業未履修者及び保健体育科教員免許を取得予定でない者を除外した。またデータの信頼性を担保するため、論理的に矛盾のある回答をした者及び努力の最小限化をした者を分析対象外した。その結果、有効回答数は107件となった。

### 2-2. 調査内容と調査方法

調査内容として①基本情報、②陸上競技授業における学習観の項目を設定した。①については、調査対象の属性の他に、これまでの運動・スポーツ経験を把握するために、中学校、高校、大学にて実施していた運動・スポーツ種目について回答を求めた。②については、小野ほか（2018）が開発した「中学生用体育学習観尺度」5因子22項目からなる質問項目を参照し、「体育の授業」を「陸上競技授業」と置き換えた質問項目を設定した。回答形式は、「全くそう思わない」「そう思わない」「どちらともいえない」「そう思う」「とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。この尺度は、中学生用に開発されたものであるが、白石ほか（2020）は、小野ほか（2018）の学年による学習観の差異に対する認識をもとに、保健体育科教員養成課程の大学生は、体育の学習を積み重ねにより体育学習観が高まる傾向にあると述べている。そのため、本研究においても大学生を対象に同尺度を採用することとした。

なお、倫理的配慮として、調査対象者に対して、調査は無記名式であり、回答は任意であることなどを明記し、本調査は成績評価とは一切関係のないことや分析結果から個人が特定されることがないことを周知したうえで実施した。

### 2-3. サンプルの基本属性

表1に示したサンプルの基本的属性をみると、大学2、3年生が半数以上の回答であるものの、1年生から4年生まで一定数の回答が得られたと考えられる。また教育実習の参加経験がない者の割合が高かった。これまでの運動・スポーツ経験（表2）は、中学、高校、大学と団体種目を経験していた者の割合が高く、個人種目の経験は、2割から3割程度であった。また、いずれかの学校期において運動・スポーツ経験がない者

表1 サンプルの基本的属性

性別	男性	59(44.9%)
	女性	48(55.1%)
大学	A大学	22(20.6%)
	B大学	20(18.7%)
	C大学	43(40.2%)
	D大学	22(20.6%)
学年	1年生	17(15.9%)
	2年生	40(37.4%)
	3年生	33(30.8%)
	4年生	17(15.9%)
教育実習経験有無	あり	26(24.3%)
	なし	81(75.7%)

表2 サンプルの運動・スポーツ経験

運動・スポーツ経験	団体	個人	なし
中学	51(47.7%)	30(28.0%)	26(24.3%)
高校	50(46.7%)	28(26.2%)	29(27.1%)
大学	35(35.7)	19(17.8%)	53(49.5)
複数種目経験	複数種目	単一種目	
	26(24.3%)	81(75.7%)	
陸上競技経験	あり	なし	
	23(21.5%)	84(78.5%)	

が一定数いた。ただし、中学から大学までの期間において、一度も運動・スポーツ経験がない者はいなかった。また中学から大学までの運動・スポーツ経験は、単一種目経験のみであった者の割合が高く、部活動等による陸上競技種目の経験は、経験がある者とないない者の回答は一定数得られたと考えられる。

#### 2-4. 統計処理

本調査の統計有意水準は5%未満とし、データ分析は、IBM SPSS Statistics29を用いた。本稿で用いた下位尺度ごとに内的一貫性の分析を行った。いずれの下位尺度においてもクロンバックの $\alpha$ 係数が0.70以上を示したことから、本調査票の内的一貫性は担保されていると考えられる(表3)。

さらに過去の運動・スポーツ経験と陸上競技授業における学習観の関係について検討するため、学校期ごとに運動・スポーツ経験を「団体」「個人」の2群、中学から大学までの運動・スポーツ経験を「複数種目経験」「単一種目経験」の2群と陸上競技の「経験あり」「経験なし」の2群に分類した。各下位尺度因子における平均得点を従属変数、過去の運動・スポーツ経験を独立変数として、下位尺度因子ごとにt検定を行った。

表3 下位尺度の信頼係数

因子	項目	$\alpha$
運動技術の習得	陸上競技の授業では、運動やスポーツの戦術を身につける	0.761
	陸上競技の授業では、体の上手な動かし方を身につける	
	陸上競技の授業では、うまく運動するためのコツを身につける	
	陸上競技の授業では、色々な用具を使った運動の仕方を身につける	
	陸上競技の授業では、色々な種類の運動の仕方を身につける	
コミュニケーション能力の涵養	陸上競技の授業では、他者と理解することの大切さを学ぶ	0.892
	陸上競技の授業では、他者と協力することの大切さを学ぶ	
	陸上競技の授業では、他者から教わるときの態度を学ぶ	
	陸上競技の授業では、他者との心の距離の取り方を学ぶ	
	陸上競技の授業では、他者へのアドバイスの仕方を学ぶ	
身体と運動に関する知識の修得	陸上競技の授業では、運動やスポーツのマナーについて学ぶ	0.841
	陸上競技の授業では、運動やスポーツの成り立ちについて学ぶ	
	陸上競技の授業では、運動やスポーツが心身に与える影響・効果について学ぶ	
	陸上競技の授業では、運動やスポーツの意義について学ぶ	
	陸上競技の授業では、運動やスポーツのルールについて学ぶ	
運動の魅力の感受	陸上競技の授業では、運動することの喜びを味わう	0.756
	陸上競技の授業では、勝敗を競う楽しさを味わう	
	陸上競技の授業では、運動することの楽しさを味わう	
身体能力の向上	陸上競技の授業では、持久力を養う	0.833
	陸上競技の授業では、筋力を養う	
	陸上競技の授業では、体の柔軟性を養う	
	陸上競技の授業では、瞬発力を養う	

### 3. 結果

各学校期における陸上競技授業における学習観の関係について検討するために、t検定を行った(表4)。各学校期の運動・スポーツ経験を「団体種目」「個人種目」の2群に分類した。なお、運動・スポーツ経験なしの者は分析から除外した。分析の結果、中学における運動・スポーツ経験による陸上競技授業における

学習観の各下位尺度因子得点はいずれも有意な差がみとめられなかった。高校における運動・スポーツ経験では、「運動の魅力の感受」に有意な差がみとめられ( $t=0.512, p<.05$ )、個人種目を経験した者が団体種目を経験した者に比べ、有意に高い結果であった。また、その差の程度は中程度であった。この結果から、高校期に経験した運動・スポーツ種目が個人種目である者は、団体種目の経験者と比べ、陸上競技の授業に

表4 t検定の結果

	団体種目 n(51)		個人種目 n(30)		t	p	ES
	M	SD	M	SD			
中学							
運動技術の習得	19.02	3.338	19.40	3.529	0.485	0.629	0.112
コミュニケーション能力の涵養	18.31	4.501	19.47	3.203	1.230	0.222	0.283
身体と運動に関する知識の修得	18.33	3.814	19.97	3.681	1.885	0.063	0.434
運動の魅力の感受	11.96	2.433	12.90	1.900	1.813	0.074	0.417
身体能力の向上	16.35	2.606	15.90	3.209	0.693	0.491	0.159
高校							
運動技術の習得	19.08	3.428	19.14	3.450	0.078	0.469	0.018
コミュニケーション能力の涵養	18.50	4.519	19.29	3.125	0.816	0.208	0.193
身体と運動に関する知識の修得	18.62	3.811	19.39	3.814	0.859	0.197	0.203
運動の魅力の感受	11.82	2.464	13.04	1.915	2.255 *	0.013	0.532
身体能力の向上	16.26	2.609	16.26	2.609	0.326	0.373	0.077
大学							
運動技術の習得	19.34	3.629	18.58	3.776	0.728	0.470	0.208
コミュニケーション能力の涵養	18.29	5.355	19.05	2.718	0.583	0.562	0.166
身体と運動に関する知識の修得	18.51	4.422	19.26	3.331	0.645	0.522	0.184
運動の魅力の感受	11.60	2.872	12.74	1.628	1.588	0.118	0.453
身体能力の向上	15.63	3.163	15.47	3.438	0.167	0.868	0.047
種目経験							
	複数種目 n(26)		単一種目 n(81)				
運動技術の習得	19.50	3.397	19.00	3.369	0.657	0.256	0.148
コミュニケーション能力の涵養	18.04	4.686	18.62	4.182	0.596	0.276	0.134
身体と運動に関する知識の修得	18.38	3.806	19.15	3.860	0.880	0.190	0.198
運動の魅力の感受	11.88	2.688	12.17	2.433	0.512	0.305	0.115
身体能力の向上	15.31	3.095	16.12	3.039	1.186	0.119	0.267
陸上経験有無							
	経験あり n(23)		経験なし n(84)				
運動技術の習得	19.22	3.825	19.10	3.255	0.153	0.878	0.036
コミュニケーション能力の涵養	18.87	3.238	18.37	4.552	0.494	0.623	0.116
身体と運動に関する知識の修得	19.52	3.930	18.81	3.829	0.786	0.434	0.185
運動の魅力の感受	12.91	1.975	11.88	2.576	1.781	0.078	0.419
身体能力の向上	15.74	3.658	15.98	2.896	0.328	0.744	0.077

† M: 平均値, SD: 標準偏差, ES: 効果量, \*:  $p<.05$

において、より運動をすることの喜びや勝敗を競う楽しさを味わう種目であると認識している可能性が考えられる。続いて、大学における運動・スポーツ経験では、いずれの下位尺度因子得点においても有意な差がみとめられなかった。

次に中学から大学までの期間において経験した運動・スポーツ種目から、複数種目を経験した者を「複数種目」と単一種目のみの経験者を「単一種目」とした2群、同様の期間において、陸上競技を経験した「経験あり」と経験がない「経験なし」の2群に分類し、t検定を行った。分析の結果、種目経験において、いずれの下位尺度因子得点においても有意な差はみとめられなかった。続いて、これまでの陸上競技の経験有無において、いずれの下位尺度因子得点においても有意な差はみとめられなかった。

#### 4. 考察

分析の結果、高校期における運動・スポーツ経験において、個人種目を経験した者は、団体種目を経験した者と比べ、「運動の魅力の感受」が有意に高かった。本稿では、体育授業における学習観（小野ほか、2018）を陸上競技の授業に置き換えている。高校期に個人種目を経験した者は団体種目を経験した者と比べ、陸上競技をより強く運動そのものの楽しさや勝敗を競う楽しさを味わえる種目であると認識している可能性がある。一方で、中学及び大学、これまでの種目経験において、「運動の魅力の感受」に有意な差はみとめられなかった。高校期での運動・スポーツ経験のみが差異を生じさせている要因については、より詳細な検証が必要であろう。

さらに本稿における調査対象者が有する陸上競技授業の学習観は、「運動の魅力の感受」を除き、過去の運動・スポーツ経験による差異が生じないことが明らかとなった。陸上競技においては、過去の運動・スポーツ経験によって、当該種目に対する学習観に違いはみられにくい結果であると言えるだろう。しかし、本稿の調査対象者は、中学及び高校の保健体育教員免許取得希望の学生であり、その他の免許取得に必要な科目を受講している。また保健体育という教科の特性上、学校期における部活動等の運動・スポーツ経験以外にも比較的スポーツ経験が豊富であることや未経験種目に対して、肯定的な印象を抱いている可能性がある。そのため、団体種目及び個人種目の経験を問わず、陸上競技を授業として捉えた場合の学習観に差が生じなかった可能性も考えられる。

#### 5. まとめ

本研究では、保健体育科教員養成課程の大学生を対象に陸上競技授業における学習観について調査を行った。分析の結果、高校期の運動・スポーツ経験によって、陸上競技授業における学習観のうち、「運動の魅力の感受」に差異がみとめられた。一方で、その他の下位尺度因子や中学から大学までの期間での種目経験や陸上競技の経験有無は、陸上競技授業における学習観において差異がみとめられない結果であった。本稿の調査対象者においては、高校期の運動・スポーツ経験による差異から陸上競技授業による運動の楽しさや勝敗を競う楽しさに対する認識に差異が生じる可能性が明らかとなった。

一方で、嘉数・岩田（2013）は、学習観は教育実習を通じて変化がある旨を指摘している。本稿における調査対象者は、教育実習経験者と未経験者が混在している。今後、教育実習において、陸上競技の授業を担当したものとそうでないもので陸上競技授業に対する学習観は異なるのかについて検証が必要であろう。また本稿の調査対象者は、大学において、陸上競技の授業を履修済みである。教員養成課程において、実技授業の経験有無が当該競技の学習観に影響を及ぼすのかについては、本調査では明らかになっていない。これまで体育教師が職業的社会化されていくうえで、運動部活動の影響が指摘されている（朝倉・清水、2011）。今後、学習観を検討する際、過去の運動・スポーツ経験を踏まえた各実技の履修有無による比較や各実技授業プログラムの検証が求められる。最後に本稿では、陸上競技単一種目のみの学習観として扱ったが、これまでの運動・スポーツ経験によって生じる学習観の差異は、陸上競技特有のものなのかについても検証が必要であると考えられる。

#### 【文献】

- 朝倉雅史・清水紀宏（2011）体育科教員への入職過程と運動部活動を通じた経験—体育科教員のライフヒストリーに着目して—。いばらき健康・スポーツ科学, 28 (1) : 1-17.
- 朝倉雅史（2016）体育教師の学びと成長—信念と経験の相互影響に関係する実証研究—。学文社：東京。
- 江藤真生子（2019）小学校体育授業の指導観の変容に関する事例研究—養成段階の学生を対象とした教科の指導法に関する講義に着目して—。日本教科教育学会誌, 42 (3) : 83-94.
- 江藤真生子・三田沙織（2023）教科の指導法に関する

- 科目における教師志望学生の体育授業の学習観及び学習方略に関する事例的検討—教職志望度に着目して—, 琉球大学教育学部紀要, (102): 169-178.
- 伊藤真帆・伊東英 (2014) 教員養成課程の学生の小学校外国語活動の指導観—英語学習観の観点から—, 岐阜大学カリキュラム開発研究, 31 (1): 51-61.
- 嘉数健悟 (2012) 体育教師志望学生の体育授業観に関する事例研究—因子構造と学年間の差異—, 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部, 61: 291-297.
- 嘉数健悟・岩田昌太郎 (2013) 教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究—教育実習の前後に着目して—, 体育科教育学研究, 29 (1): 35-47.
- 木原俊行 (2004) 授業研究と教師の成長, 日本文教出版: 東京.
- 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説保健体育編, 東山書房: 京都.
- 成家篤史・鈴木直樹・石塚諭 (2018) 体育の指導観形成における組織内の教師間の関係性に関する研究—小学校教師に着目して—, 体育科教育学研究, 34(1): 1-16.
- 及川佑介・長谷川千里 (2017) 高等学校における体育実技授業の実態調査—体育女子大学生と一般女子大学生の比較—, 東京女子体育大学女子体育研究所報, (11): 41-43.
- 小野雄大・友添秀則・高橋修一・深見英一郎・吉永武史・根本想 (2018) 中学校の体育授業における学習者の学習観および学習方略の関連に関する研究, 体育学研究, 63: 215-236.
- 佐々木大志 (2022) 高等学校における陸上競技授業の実態調査, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, (57): 91-97.
- 白石智也・房野真也・森木吾郎・高田康史・前田一篤・松本佑介・藤島廉 (2020) 保健体育科教員養成課程入学者の体育学習観に関する調査研究—教職志望度の差異に着目して—, 人間健康学研究, 3: 51-57.
- 鈴木正博 (2010) ミクロ・ポリティクスの視角による学校の組織・文化研究の再検討, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 50: 295-304.
- 山平芳美・木村寿一・齊藤一彦・白石智也 (2020) カンボジアの初等教員養成段階における体育授業観の様態に関する研究—特に「体育科教育法」受講前後の変容に着目して—, 運動とスポーツの科学, 25(2): 71-84.
- 吉崎静夫 (1997) デザイナーとしての教師 アクターとしての教師, 金子書房: 東京.